

競争文脈における援助行動の研究  
— 責任性の判断・感情との関係 —

青 柳 肇\* 細 田 一 秋\*\* 芳 野 郁 朗\*\*\*

**The attributional study of helping behavior in competitive context.**

Hajime Aoyagi\*, Kazuaki Hosoda\*\* & Ikuo Yoshino\*\*\*

**Abstract**

The purpose of this study was to analyse attributionally the helping behavior in competitive context. Subjects were 211 college students (106 males and 105 females). The subjects were divided into two conditions, which were busy and free conditions, and administered questionnaire which contained 12 scenarios. The degree of time to spare (busy/free), depth of intimacy (close/common/quarrel), controllability (effort/noneffort), and belonging group (ingroup/outgroup) were taken as the independent variables into 12 scenarios. The dependent variables were helping behavior, positive emotion (sympathy), negative emotion (anger) and responsibility.

Subjects of two conditions were asked to read 12 scenarios and to answer the degrees of helping behavior, positive emotion, negative emotion and responsibility by 6 points scales.

Main results were as follows.

1. Helping behavior was promoted by having free time.
2. Helping behavior was more strongly related to two kinds of emotion (sympathy and anger) than responsibility.
3. Intimacy was associated with helping behavior and two kinds of emotion. These results were consisted with one of the Weiner's models about helping behavior.

---

\*人間基礎科学科

\*\*工学院大学

\*\*\*人間科学研究科

*\*Department of human basic sciences*

*\*\*Kogakuin University*

*\*\*\*Graduate school of human sciences*

※本研究は、1996年度早稲田大学特定課題研究の援助を受けて行われた。

## 問題と目的

向社会的行動の一つとされる援助行動 (Helping Behavior) は、「他者が望む状態を実現するために手を貸す行動」(中村 1976) と定義される。援助行動の研究は、ニューヨークでの殺人事件で多くの人が、被害者の悲鳴を聞いているのに誰も助けることをしなかったという事実に端を発している (Latane & Darley, 1970)。当初は、被害者の周囲に多くの人間が存在していたため、援助者の責任の分散が生じ援助行動が抑制されたことが問題とされた。すなわち、援助行動の状況要因が問題とされたのである。状況要因は、先に述べたような他者の存在以外に過密性 (Milgram, 1970)、援助行動を行うことによる援助者のコスト (労力) の多寡 (Sprafkin, et al., 1975)、等が検討されている。このように従来の研究では、状況要因や後述する援助者のパーソナリティの問題が中心に論じられ、文脈の問題についてはほとんどとり上げられてこなかった。文脈は援助行動に大きな役割を演じると予想される。たとえば、競争事態か非競争事態か、時間的に余裕があるか否か、が援助行動に大きな影響をもつであろうことは、容易に想像がつく。競争事態や時間的な余裕のない事態での援助行動は、先に述べた援助者のコストに類したものである。ただ、ここでのコストは労力の問題ではなく、援助することによって獲得可能なものが得られないとか勝負に負けるなどの援助者側の損失が問題となる。こうした文脈での援助場面は、日常的に多くみられるのであるが研究は少ない。

その後状況要因以外では、パーソナリティを含む個人的要因とりわけ援助者の共感性が問題とされるようになる (Feshback, N.D, 1978; Coke, et al. 1978; Eisenberg & Mussen, 1989)。一方、それまで検討されることのなかった被援助者の要因が帰属理論的に議論されるようになる (Weiner, 1980, 1986, 1995)。Weiner のモデルでは、援助場面での被援助者の統制可能性が問題とされ、被援助者が援助場面で統制可能と判断されれば、援助者に怒りの感情が生じ援助行動が起こらないのに対して統制不可能と判断されれば、同情 (共感性) が喚起され援助行動が生起される。ここで統

制可能性とは、努力などの内的要因である被援助者の意志や行動で事態を切り抜けるか否かについての可能性を意味している。ここでは援助者の共感性が被援助者の行動に対する判断によって媒介されている。しかし、このモデルでは、援助者の共感性を生む要因として被援助者との関係に触れられていない。関係性のうち被援助者と援助者の親密さ、同一グループか否か等の要因は共感性に強い影響を与えると考えられる。すなわち、共感性を高めると考えられる「親密度が高く、同一グループ」である場合、援助場面で同情や哀れみなどの感情を生起させ、援助行動が生じることが予想されるのである。

以上のような問題を踏まえ、本研究では時間的な余裕があるか否かで大きく分け、競争場面での援助者と被援助者の関係を親密度 (Intimacy) と内集団か外集団 (Ingroup / Outgroup) というグループの要因、更に帰属理論による被援助者の統制可能性 (Effort / Noneffort) の要因を独立変数とし、援助行動、感情 (哀れみ、怒り)、被援助者の責任性を従属変数として検討することを目的とした。

## 方 法

- (1) 被験者：大学生 211 名 (男子 106 名 女子 105 名)
- (2) 実験材料：以下のようなシナリオを設定し、従属変数である「援助行動」「同情 (共感性)」「怒り」「責任性」について 6 件法で回答させた。シナリオは、競争場面であることを固定し、時間的な余裕度 (Busy/Free) の条件で二分し、Between Subject とした。二つの条件は、各々独立変数として「親密度」3 変数 (Intimate/Neutral/Quarrel)、「内外集団所属」2 変数 (Ingroup/Outgroup)、「統制可能性」2 変数 (Effort/Noneffort) の 3 要因、計 12 変数 ( $3 \times 2 \times 2$ ) からなるシナリオを設定し、Within Subject として調査が実施された。従って、被験者は、12 のシナリオに答えることになる。例として、以下に Busy 条件の Intimate, Ingroup, Effort, と Free 条件の Quarrel, Outgroup, Noneffort, のシナリオを示す。なお、男子被験者用シナリオと女子のそれとは、登場人物が太郎君と花子さんになっていることが違うだけでそれ以外の内容は同一である。また、親密度の Neutral は、ごく普

通の友人になっている。なお、例では3要因の変数には下線を引いたが、実際の質問紙には引かれていない。また、2つの条件の前文と回答欄は同一であるので、Busy条件だけにそれを記した。

BUsy条件, Intimate, Ingroup, Effort変数のシナリオの例 (男子用)

就職シーズンです。あなたが入りたい会社は、新卒者を20名採用することを決定しました。ところが、応募者は500名を越えています。採用は、筆記と面接の試験結果で決定されます。筆記試験の問題の傾向はおよその検討がつくのですが、たいへん難しいことがわかっています。しかし、あなたはこの種の問題は得意で、簡単に解くことができます。

太郎君は、同じ大学の親友です。その太郎君もその会社への入社を希望しています。ところが、太郎君は、一生懸命勉強するのですがこの種の問題は、得意ではありません。ある日、太郎君がその問題の解き方を聞きにきました。あなたは、この日忙しくてやらなければならないことがたくさんあります。

あなたは、太郎君に対してどのように反応しますか。

全く教えない 1-2-3-4-5-6 必ず教える

かわいそうだと思う 1-2-3-4-5-6 とてもかわいそうだと思う

決して怒らない 1-2-3-4-5-6 とても怒る

その問題が出来ない責任は大きい 1-2-3-4-5-6 責任は小さい

Free条件, Quarrel, Outgroup, Noneffort変数のシナリオの例 (女子用)

花子さんは、違う大学に所属しています。あなたは、彼女と気が合わず好きになれません。その花子さんもその会社への入社を希望しています。ところが、花子さんはふだんからあまり勉強しないので得意ではありません。ある日、花子さんがその問題の解き方を聞きにきました。あなたは、この日特に用はありません。

(3) 手続き：心理学の授業終了後、クラスを2分し、その2分された被験者各々に上記の12問よりなる2種類 (Busy条件, Free条件) のシナリオのどちらかを与え、回答させた。なお、被験者は、Busy条件118名 (男子55名, 女子63名), Free条件93名 (男子51名, 女子42名) であった。

結果と考察

結果の解釈をし易いように「責任性」の変数は得点を反転させ、「責任は大きい」を6点、「責任は小さい」を1点とした。また、条件間、シナリオ間で有意な性差がみられなかったため、男女は

合計して検討を行った。

従属変数である「援助行動」「同情 (共感性)」「怒り」「責任性」の4変数の関係を検討するため、相関係数を求めた (表1 参照)。「援助行動」と

表1 各従属変数間の相関係数

	援助行動	同情	怒り
同情	0.34**		
怒り	-0.38**	-0.10**	
責任	-0.12**	0.08**	0.22**

\*\* P<.01

「同情（共感性）（ $r=.34$ ）」「怒り（ $r=-.38$ ）」の2つの感情変数との間に有意な関係がみられた。また、「怒り」と「責任性」の間も有意な相関（ $r=.22$ ）がみられた。また、「援助行動」と「責任性」の間には、有意な負相関（ $r=-.12$ ）がみられた。

4変数の条件間（Busy/Free）と条件内での差を検討するために、2要因の分散分析（条件間対応なし、条件内対応あり）を行った。その結果、表2のようであった。条件間で4変数の間に有意な差がみられた。また、条件内でも4変数の間に有意な差がみられた。また、「同情（共感性）」と「怒り」

」の変数に条件間、条件内の交互作用がみられた。全てのシナリオにおいて、Free条件と比較しBusy条件は「援助行動」「同情（共感性）」得点で低く、「怒り」と「責任性」得点で高いことが示された。また、「援助行動」が「同情（共感性）」と「怒り」の二つの感情および「責任性」によりどのように説明されるか検討するために、重回帰分析を行った。その結果、以下のような式が得られた。

$$\text{「援助行動」} = 0.352 \times \text{「同情」} - 0.358 \times \text{「怒り」} - 0.070 \times \text{「責任性」} + 3.478 \quad R^2 = 0.243$$

表2 分散分析表（F値）

	援助行動	同情	怒り	責任	d f
要因：Busy/Free	17.06**	5.36*	11.08**	4.68*	1/209
要因：シナリオ内	182.83**	73.56**	45.37**	22.05**	11/2299
交互作用	1.37	2.79**	3.04**	0.49	11/2299

\*  $P < .05$  \*\* $P < .01$ 

表3 シナリオごとの従属変数の平均と標準偏差

		シナリオ													
	条件		IEI	INI	FEI	FNI	QEI	QNI	IEO	INO	FEO	FNO	QEO	QNO	
援助行動	B	M	4.65	4.00	3.94	3.22	2.85	2.46	4.62	4.09	3.76	3.14	2.65	2.22	
		SD	1.24	1.34	1.37	1.35	1.36	1.33	1.28	1.35	1.28	1.38	1.44	1.37	
	F	M	5.30	4.73	4.68	4.06	3.41	2.90	4.68	4.77	4.36	3.91	3.15	2.74	
		SD	1.05	1.37	1.19	1.48	1.49	1.52	1.35	1.32	1.30	1.49	1.59	1.53	
同情	B	M	3.55	2.72	3.16	2.33	2.24	1.91	3.68	2.95	3.05	2.41	2.08	1.75	
		SD	1.44	1.41	1.49	1.29	1.34	1.13	1.52	1.34	1.43	1.27	1.19	1.11	
	F	M	2.87	2.21	2.88	2.03	2.03	1.75	3.10	2.47	2.73	2.09	2.11	1.70	
		SD	1.48	1.16	1.47	1.13	1.24	1.13	1.65	1.30	1.44	1.14	1.31	1.02	
怒り	B	M	2.05	2.72	2.34	2.81	3.05	3.42	2.03	2.46	2.55	2.94	3.16	3.50	
		SD	1.11	1.43	1.22	1.47	1.60	1.72	1.18	1.30	1.33	1.46	1.62	1.74	
	F	M	1.63	2.43	1.83	2.33	2.30	2.68	1.72	2.31	2.05	2.25	2.46	2.68	
		SD	0.99	1.29	1.02	1.38	1.46	1.68	1.09	1.44	1.20	1.39	1.62	1.74	
責任	B	M	2.72	3.39	2.85	3.46	2.90	3.43	2.77	3.38	2.78	3.35	2.96	3.42	
		SD	1.58	1.71	1.56	1.78	1.71	1.89	1.49	1.65	1.44	1.65	1.69	1.97	
	F	M	2.22	2.99	2.24	3.12	2.39	3.20	2.32	3.02	2.38	3.07	2.60	3.06	
		SD	1.28	1.73	1.39	1.81	1.60	1.93	1.42	1.62	1.48	1.75	1.71	1.90	

条件のBはBusyを、FはFreeを表す。

シナリオ欄の最初のアルファベットは、親密度（IはIntimacy（親友）、FはFriend（普通の友だち）QはQuarell（仲の悪い友だち））を表す。

第2のアルファベットは、統制可能性（EはEffortを、NはNoneffort）を表す。

第3のアルファベットは、グループの内（IはIngroup）と外（Oはoutgroup）を表す。

行動」は、同情と怒りの感情が責任性より強く関与することが示された。

既述のように、条件間で4変数に有意差がみられたので条件別に結果を処理し、解釈することとした。表3は、条件別に各変数のシナリオごとの平均と標準偏差を示したものである。

また、4従属変数における条件別にシナリオ間の下位検定を行った（対応あるF検定）。結果は以下の通りであった。その際、条件内の3種の独立変数（親密度、統制可能性、内外集団所属）の各々単一の効果を検討するため、当該の独立変数は他の2種類の独立変数を一定にした上で比較した。ここでは便宜的にBusy条件とFree条件に分けて

記す。

#### ①Busy条件について

表4は、親密度による従属変数の違いを示したものである。どの場合も以下に示すような同じ傾向がみられた。すなわち、親密度の強弱による責任性には差がみられなかった。親密度が高いほど、援助行動、同情が強く、怒りが小さい。

表5は、統制可能性での従属変数の違いを示したものである。どの場合も、全ての変数に有意差がみられた。その関係は、全て同じで、統制可能（努力なし）では怒りと責任性が大きく、統制不可能（努力あり）では援助行動、同情が強いことが示された。

表4 親密度の違いによる各従属変数の差（Busy条件）（F検定）

	統制不可能—同一集団		統制可能—同一集団	
	F値	df	F値	df
援助行動	159.38***	2/258	95.18***	2/262
同情（共感性）	65.95***	2/258	30.19***	2/258
怒り	45.07***	2/258	18.13***	2/260
責任性	1.05	2/258	0.12	2/256
	統制不可能—異集団		統制可能—異集団	
	F値	df	F値	df
援助行動	151.46***	2/246	144.24***	2/246
同情（共感性）	78.11***	2/244	60.86***	2/244
怒り	42.55***	2/244	36.97***	2/244
責任性	1.63	2/242	0.16	2/242

\*\*\*P<.001: \*\* P<.01: \* P<.05: † P<.10

表5 統制可能性の違いによる各従属変数の差（Busy条件）（F検定）

	親密度高—同一集団		親密度中—同一集団		親密度低—同一集団	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	43.49***	1/131	49.44***	1/131	16.06***	1/130
同情（共感性）	69.17***	1/131	67.10***	1/129	12.83***	1/130
怒り	747.12***	1/131	29.64***	1/130	12.43***	1/130
責任性	46.48***	1/131	29.34***	1/128	21.57***	1/129
	親密度高—異集団		親密度中—異集団		親密度低—異集団	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	19.19***	1/127	59.69***	1/128	29.94***	1/124
同情（共感性）	41.08***	1/126	32.37***	1/127	14.14***	1/120
怒り	18.97***	1/126	18.18***	1/127	13.11***	1/123
責任性	19.22***	1/125	24.13***	1/126	14.97***	1/122

\*\*\*P<.001: \*\* P<.01: \* P<.05: † P<.10

表6は、内外集団所属による従属変数の違いを示したものである。他の独立変数と比べて、有意差のある変数が少なかった。計24の従属変数のうち、有意差は5変数、有意傾向は1変数だけであった。親密度が高く統制可能である場合、同情は同一集団に対するほうが異集団より大きく、怒りは異集団に対するほうが強い。親密度が普通で統制不可能な場合では、怒りは異集団に対して強い。また、親密度が低く統制可能である場合、援助行動と同情は同一集団に対して強くなる。親密度が低く統制不可能であった場合、援助行動は同一集団に対して強くなる傾向がある。以上が、有意差または有意差傾向のある変数であるが、他の独立

変数のような一貫した結果はみられなかった。

## ②Free条件について

表7は、親密度による従属変数の違いを示したものである。

責任性の一部を除く他の全ての従属変数に有意差がみられた。援助行動、同情は親密度が強いほど、また怒りは親密度が低いほど各々大きくなり、責任性は、親密度が低いほど大きくなる傾向があった。

表8は、統制可能性における従属変数の違いを示したものである。

どの場合も、全ての変数に有意差または有意差の傾向がみられた。Busy条件と同じ方向の差で

表6 集団所属の違いによる各従属変数の差 (Busy条件) (F検定)

	親密度高—統制不可能		親密度高—統制可能		親密度中—統制不可能	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	0.08	1/131	0.97	1/126	2.69	1/127
同情 (共感性)	2.33	1/131	4.53**	1/127	1.61	1/126
怒り	0.01	1/131	6.43**	1/127	7.38**	1/126
責任性	0.04	1/131	0.04	1/126	1.61	1/126
	親密度中—統制可能		親密度低—統制不可能		親密度低—統制可能	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	0.81	1/128	3.03 †	1/123	7.80**	1/123
同情 (共感性)	1.70	1/126	2.23	1/123	6.88**	1/122
怒り	1.20	1/127	1.16	1/123	0.94	1/122
責任性	1.17	1/125	0.56	1/122	0.05	1/121

\*\*\*P<.001: \*\*P<.01: \*P<.05: †P<.10

表7 親密度の違いによる各従属変数の差 (Free条件) (F検定)

	統制不可能—同一集団		統制可能—同一集団	
	F値	df	F値	df
援助行動	109.67***	2/204	104.81***	2/206
同情 (共感性)	30.04***	2/204	13.87***	2/206
怒り	16.85***	2/204	3.92*	2/206
責任性	2.45 †	2/204	2.03	2/206
	統制不可能—異集団		統制可能—異集団	
	F値	df	F値	df
援助行動	69.33***	2/188	92.67***	2/190
同情 (共感性)	27.74***	2/190	26.18***	2/190
怒り	14.67***	2/190	6.91***	2/190
責任性	2.78 †	2/199	0.20	2/190

\*\*\*P<.001: \*\*P<.01: \*P<.05: †P<.10

表8 統制可能性の違いによる各従属変数の差 (Free条件) (F検定)

	親密度高—同一集団		親密度中—同一集団		親密度低—同一集団	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	32.06***	1/103	39.92***	1/102	27.28***	1/103
同情 (共感性)	37.76***	1/103	54.68***	1/102	7.56**	1/103
怒り	56.75***	1/103	23.13***	1/102	15.63***	1/103
責任性	26.71***	1/103	23.72***	1/102	22.89***	1/103
	親密度高—異集団		親密度中—異集団		親密度低—異集団	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	4.53*	1/99	15.01***	1/99	13.34***	1/96
同情 (共感性)	30.09***	1/100	29.21***	1/99	14.86***	1/96
怒り	23.73***	1/100	3.56†	1/99	4.45*	1/96
責任性	20.98***	1/100	20.88***	1/99	7.57**	1/96

\*\*\*P&lt;.001: \*\*P&lt;.01: \*P&lt;.05: †P&lt;.10

あった。すなわち、援助行動と同情は統制不可能な場合に強くなり、怒りと責任性は統制可能な場合に強くなる。

表9は、内外集団所属による従属変数の違いを示したものである。Busy条件と同様に有意な差のある変数は少ない。親密度が高く、統制不可能である場合、同一集団への援助行動は強く、同情も強い傾向となる。親密度が高く統制可能な場合、同一集団に対しての同情が強い。親密度が普通で統制不可能である場合、援助行動は同一集団に対して、怒りは異集団に対して強くなる。以上が有意な差のみられた変数であったが、Busy条件と同様一貫した結果はみられなかった。

これらの結果から、以下のことが考察される。相関分析においても、重相関分析においても「援助行動」は、「同情(共感性)」が高いと生じ易く、「怒り」が強いと生じにくくなる。この結果は、Weiner(1995)の示すモデルに一部合致していた。彼は、「援助行動」を5種類のモデルで説明している。第1のモデルは、刺激の生起に対する「責任性」(コントロール可能性)の認知が「怒り」や「同情」の感情に影響して間接的に「援助行動」に結びつくというもので、モデル2はモデル1と同様に間接的に影響すると同時に「援助行動」に直接的に影響すると考えるものである。第3のモデルは、2つの感情が相互に拮抗的に影響し合うと

表9 集団所属の違いによる各従属変数の差 (Free条件) (F検定)

	親密度高—統制不可能		親密度高—統制可能		親密度中—統制不可能	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	6.45**	1/102	0.03	1/100	10.25**	1/98
同情 (共感性)	3.05†	1/103	8.02**	1/100	2.38	1/98
怒り	1.91	1/103	1.34	1/100	5.84*	1/98
責任性	1.34	1/103	0.00	1/100	2.06	1/97
	親密度中—統制可能		親密度低—統制不可能		親密度低—統制可能	
	F値	df	F値	df	F値	df
援助行動	1.49	1/99	2.50	1/96	1.13	1/96
同情 (共感性)	0.51	1/99	0.79	1/96	0.06	1/96
怒り	0.36	1/99	2.32	1/96	0.15	1/96
責任性	0.09	1/99	2.60	1/96	2.60	1/96

\*\*\*P&lt;.001: \*\*P&lt;.01: \*P&lt;.05: †P&lt;.10

するものであり、「責任性」認知はモデル1と同様に間接的に影響するものである。第4モデルは、第2モデルと第3モデルが組合わさったもので「責任性」認知が直接「援助行動」に影響する面と感情を媒介し間接的に影響するが、その2つの感情は相互に拮抗的に作用するというものである。また、第5モデルは、刺激の生起が直接「援助行動」に影響するものである。Weiner(1995)は、この例として落第生のほうが溺れている人より援助行動を引き起こし易いことを示す。それは、労力のコストがかからないからである。本研究は、Weinerモデルを検証する事を目的としたものではない。従って、全てのモデルについて検討したわけではないが、少なくとも「責任性」認知( $r=-0.12$ )は、「怒り」( $r=-.38$ )と「同情 (共感性)」( $r=.34$ )の2つの感情ほど「援助行動」に強い影響をもつものではなく、間接的な効果の可能性が示唆される。従って、本研究で検討する限りでは、モデルの妥当性は、モデル2は低くモデル1が高くなる。特に、「責任性」認知と「援助行動」との関係( $r=-0.12$ )が「怒り」との関係( $r=0.22$ )より弱いことからそのことが推測される。また、「同情 (共感性)」と「怒り」の関係が負の関係( $r=-.10$ )で拮抗してはいるがそれほど強い関係にあるわけではないことから、モデル3やモデル4の可能性は少ないといえよう。ここでは、モデル5については検討する資料がないので言及しない。

援助行動が、援助者のコストや時間的余裕と関係することは既に知られている(Dovidio, 1984, Batson, 1987)。本研究もほぼ同じ結果を得ている。しかし、時間的余裕が同情や怒りといった感情や責任性に影響を与えるという結果は、筆者の知る限りない。同情に関しては、時間がなく、本当は助けたいのだが、それがかなわないことの現れであろうし、怒りに関しては忙しく他人にかまう時間はないといった苛立ちの現れと考えられる。従来の研究では、怒りは被援助者の統制感で検討されてきたが(Weiner, 1980, 1986)、本研究では援助者側の要因(時間的余裕度)であり、興味深い問題である。また、責任性も統制可能性と関係するとされ(Weiner, 1995)、時間の余裕については検討されてこなかった。今後これらの問題をさらに検討する必要がある。

また、下位検定の結果から、従来の研究結果と同様に親密度が援助行動をはじめ、多くの従属変数で強く働いていた。ただし、同情に関しては一部統制可能性のほうが強く関わっていた。また、責任性に関しても他の従属変数より親密度の影響は小さい。責任性は、統制可能性のほうと強く関わり、Weiner(1995)の主張を裏付けたものとなった。

また、内外所属集団は、援助行動を始めとする従属変数に他の要因より有効に働かないことが示された。これは、大学生にとって自分と同一の大学に所属しているか否かは、大きな問題でないことを示すものと言える。準拠集団など心理的に強いつながりをもった集団を変数にして再度検討の必要がある。

以上のことから、次のことが結論として示された。

時間的余裕は、援助行動、正負の感情、責任性に強い影響を与える。親密度は、援助行動、正負の感情に強く影響する。責任性については統制可能性からの影響を受ける。援助行動は正負の感情からの影響を強く受け、責任性からの影響をうけるが、その効果は感情ほど強くなく間接的影響を受けていることが示唆された。

## 引用文献

- Batson, C.D.(1987) Prosocial Motivation: Is it truly altruistic? In L.Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*(Vol. 20, P.65-122). Academic Press.
- Coke, J.S., Batson, C.D. & McDavis, K. (1978) Empathic mediation of helping : A two-stage model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 752-766.
- Dovidio, J.F. (1984) Helping behavior and altruism: An empirical and conceptual overview. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 17, P.361-427). Academic Press.
- Eisenberg, N. & Mussen, P.H.(1989) *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge University Press. Feshback, N.D.



- (1978) Studies of empathic behavior in children. In B.A. Maher (Ed.), Progress in experimental personality research (Vol. 8, 1-47). Academic Press.
- Latane, B. & Darley, J.M. (1970) The unresponsive bystander: Why doesn't help? Meredeth Corporation. 竹村研一・杉崎和子(訳) (1977)冷淡な傍観者 プレーン出版
- Milgram, S. (1970) The experience of living in cities. Science, 167, 1461-1468
- 中村陽吉 (1976) Helping behavior の実験社会心理学的研究についての文献リスト 東京女子大学紀要「論集」
- Sprafkin, J.M., Liebert, R.M. & Poulos, R.W. (1975) Effects of a prosocial example on children's helping. Journal of Experimental Child Psychology, 20, 119-126
- Weiner, B.(1980) A cognitive (attribution 9-emotion-action model of motivated behavior: An analysis of judgments of helping. Journal of Personality and Social Psychology, 39, 186-200.
- Weiner, B.(1986) An attributional theory of motivation and emotion. Springer-Verlag
- Weiner, B.(1995) Judgments of Responsibility, The Guilford Press.